

## 天台常行堂阿弥陀五尊像の原初型式に関する考察

大原 嘉豊（京都国立博物館）

慈覚大師円仁は、唐の五台山で行われていた法照流五会念仏を常行三昧の作法として日本に伝えたが、その道場となる常行堂の本尊阿弥陀五尊像の原初型式については諸説が存在している。2005年、富島義幸氏により資料を博搜した包括的な研究〔「阿弥陀五尊の諸形式と中世仏教的世界観」『佛教藝術』280号〕が発表されたが、美術史的観点から見た場合、原初型式に対する所見を異にするため、改めて標題の問題を考えたいと思う。

さて、その最大の問題は、原初構成である。現存遺品では、大きく二通りの構成に分類される。即ち、第一に、阿弥陀に金剛法・利・因・語四親近菩薩を加えた五尊構成、第二に阿弥陀に観音・勢至・地藏・龍樹の四菩薩を加えた五尊構成である。このいずれが円仁請来の原初構成であったのかということである。

目下、第一の構成を原初型式とみる説が優勢のように見受けられる。その理由は、密教を重視した当初の四親近菩薩から、恵心僧都源信の浄土教の流行に伴って浄土教的四尊に代わるとするもので、歴史上の枠組みと連動しているため理解しやすいと言える。

しかし、本論の結論を前提的に述べれば、第二の構成が原初型式だと考える。従来、説が分かれていたのは史料が乏しいことが主因であるが、論者は、史料と方法との再検討を通じて、既知の史料中にこれを立証する信頼すべきものを見出し得たと考えている。それは、『覚禅鈔』阿弥陀法下「五尊曼荼羅」であり、以下の通りである。

「問、観音勢至加地藏龍樹四、為弥陀五仏、出何文乎。答、未見本説、但、大唐并州一国人、皆念弥陀、其国人命終時、阿弥陀仏観音勢至地藏龍樹、皆来引撰云々」

ここで、注目すべきは経軌以外からこの説話が導かれている点、かつ并州、つまり五台山の所在地である山西省の説話を引いている点である。

同じ阿弥陀法下に「五十二身像」があるが、これは「阿弥陀五十菩薩像」と称されるものであり、関連説話を「唐伝記」から引いている。しかし、これを「五十二」とする現存文献はない。しかし、貞観八年（六三四）の中国四川省臥龍山千仏巖『阿弥陀仏并五十二菩薩伝』が発見され、「唐伝記」は然るべき古い根拠があったことが判明した。

論者は、これら二例の典拠は、歴史的背景を勘案すると、遼・非濁撰『随願往生集』二十卷（佚）しか想定し得ないと考える。同書の史料性格により、第二の五尊構成が円仁の原初本尊構成だと判断される。

以上の推定に、各種遺品の形式を併せて考えることで、構成と形式をあわせた原初型式は復元され、円仁当初の五台山仏教の文化的背景からもこれは説明され得ると考える。